

Modern

Ragtime

Guitar Solos

モダン・ラグタイム・ギターソロ
Vol. 1

編曲・解説 青木 日高

The Modern Ragtime Guitar Solos : vol.1
by Hidaka AOKI

発行・発売 : RAGタイム



目次

はじめに 03

表記・用語解説 03

★	メープル・リーフ・ラグ	Maple Leaf Rag	04
		Tuning : Dropped G (DGDGEB)	Capo : 1 fret	
★	イージー・ウィナーズ	The Easy Winners	10
		Tuning : Dropped G (DGDGBD)	Capo : 1 fret	
★	エンターテイナー	The Entertainer	16
		Tuning : Open C on D (DGCCE)		
★	エリート・シンコペーションズ	Elite Syncopations	22
		Tuning : Standard	Capo : 1 fret	

《 著 者 楽 歴 》

1967年(昭和42年)札幌生まれ。幼少よりビートルズを中心とする「洋楽」を聴いて育つ(育てられる?)。小学校よりギターを始め、中学時代からはフィンガーピッキング及びエレキギターへと展開。高校への入学前に1年間南米で生活し「ワールド・ミュージック」を体感。帰国後は主にブルースロック系のバンド活動と、平行してジョン・レンボーンのコピーやパッサ系ギターの演奏も始める。大学入学より名古屋へ居住、以後そのまま在住。20世紀末にラグタイム(ギター)に出会い、以降はスコット・ジョプリンを中心としたクラシック・ラグタイム(ピアノ)作品のギター編曲に没頭、現在に至っている。

元日本ラグタイムクラブ事務局会員、ホームページにて『ラグタイム受難曲@ギター編』発表中。

はじめに

20世紀の初頭、米国を中心に大流行した音楽『ラグタイム』。その同じ世紀の末に—1999年頃から、ピアノ・ラグタイムの曲をギター向けにアレンジするという「作業」を始め、いくばくかの年月が経過しました。「作業」と称したのは、趣味としてはいささか念が入っているが、「仕事」という程の収入を与えてくれる訳でもないからなのですが、実のところ<技の修練>というぐらいは合っているのかもしれない。

しかし、かくも熱中するに至るにはやはりそれなりの理由があるので、恐らくそれが『ラグタイム、それ自体の魅力』、ということに他ならないのだと思います。それは難しく言うならば、「一般に『クラシック・ラグ』と呼ばれるような優れたラグタイム曲の作品群を、自分の手と頭を使って再び<現在性の中に>紡ぎ出してみたい」という願望に端を発するものなのかもしれません。あるいはもっとシンプルに、『ラグタイムに捕らえられて』とでも言うのが、実際ふさわしい感じかもしれませんが。

そんな自前のラグタイム編曲作品を本書では4曲ほど収録していますが、全ての曲が「ラグタイム王」と呼ばれた(黒人)作曲家・ピアニストのスコット・ジョブリンの作品です。ジョブリンの曲ばかりになったのは幾つか理由があるのですが、主には ①私の編曲の中で最も多い ②ギターに(割と)置き換えやすい ③作品自体のクオリティーが高い ④今日最も有名なラグタイマー といった点を挙げられるでしょう。いずれにしても魅力的な作品が多くある訳で、だからこそ「わざわざギターに置き換えるまで弾いてみたい」と希求するのだと思います。もちろん「ピアノ曲」をギターで弾くのですから、技術的な観点からすれば—というか当初的—toやはり「そのままでは無理」ですし、色々と間引いたり置き換えたりする必要があります。(それでも「楽に弾かせてくれない」というのが実情ですけど…)とは言っても、「全く不可能」とも思われない訳で、本書をお手に取られている方にもその辺りの心情は(幅の大小はあはれど)ご理解されているのでは?と推測しているのですが…。

ということで、選曲に当たっては「過度に難し過ぎない」という点に配慮しつつ、なるべく誰かが弾いてみたいと感じるような、魅力的かつ有名な曲を採り上げたつもりです。また、「編曲集」といって観客からの全体的な配慮もしてみたく思い、ギターのチューニングや原曲のキー、カポタストの使用の有無といった点からも、バリエーションに富むように一考してみました。

(余り一般的とは言い難い)の作品集が、皆様のギター&ミュージックライフの「ささやかな添え物」としてお役に立てば幸いです。

♪ 表記・用語解説 ♪

- ・小節数の位置表記は [] を用いています。例 [5]=5小節目 またタブ譜には、各小節の左上に小節数が表記してあります。
- ・小節内での位置指定(目安)は、: の後に<八分音符でカウントした拍数>を書き加えて行っています。(ラグタイムに多い4分の2拍子の曲では、1拍目まで指定可能です) 例 [5:1] =5小節目の1拍目、[10:3-4]=10小節目の3拍目から4拍目にかけて
- ・チューニングと推奨のカポタスト装着位置は、目次及び各曲冒頭の曲名表示の右側に書かれています。(チューニングはタブ譜冒頭にも表記されています) 例 Tuning: DGDGBE=6弦よりDGDGBE→ドロップG、Capo: 1=カポタストを1フレットに装着
- ・五線譜の表記は、上記推奨状態での実際の発音に合わせています。(つまり、カポタストをセットして弾かれる実音) この状態で「ピアノ原譜」と同じキー(調性)になるようアレンジされていますから、原譜をお持ちの方はアレンジされた結果の音列と容易に比較できます。
- ・弦表記は「丸数字」、フレットは「F」として記述しています。例 ①=1弦 3F=3フレット、②5F=2弦5フレット
- ・Cj=セーハ。例 2FCj=2フレットセーハ、MCj=メディアセーハ(6弦全てでなく数弦に渡るセーハ)
※メディアセーハとセーハの違いは厳密ではないのですが、ベース音がセーハ外に求められるケースでメディアと称している感じです。
- ・PC=ポジション・チェンジ。ラグタイムギターアレンジではとにかくPCが多くなるので、「早く正確に」というのが魂門になってきます。
- ・アポヤンド=ピッキングした指が手前の弦にもたれかかる奏法。空中へ浮くような形はアルアイレ。(フォークギターではこちらが一般的)
- ・指の表記は一部に略記を用いています。例 人指=人差し指
- ・ゲートタイム=音符長、音符の長さ。MIDI用語的に「ゲートタイム」と書いているのは、表記音符長と実際の発音長が「演奏」というスタンスにおいては異なったモノとなることを反映しています。(アルペジオ奏法が典型的な例です)

Maple Leaf Rag

Composed by Scott Joplin (1899)

『メープル・リーフ』は僕をラグタイムの作曲王 *King of Ragtime Composers* にしてくれるだろう」

(ジョプリンが弟子のアーサー・マーシャル *Arthur Marshall* に語ったと言われている言葉)

ラグタイムにおける最大のヒット曲であると同時に、アメリカ音楽史上において「ラグタイム時代」が築かれる源ともなった重要な楽曲です。全盛期には「シートミュージック *Sheet Music* 」という商品の楽譜販売で数十万部売ったとされるほか、その楽曲スタイルは「クラシック・ラグタイム *Classic Ragtime* 」(クラシック調の気高いラグ)と呼ばれ、以降のさまざまな音楽に計り知れない影響を与えました。

この曲が出版されるに至る経緯については様々な「伝説」があって、どれも楽しいエピソードに満ちていますが、ただひとつ確かなことは、『ジョプリンとセダリアの音楽店主だったスターク氏 *John Stark* との間に、この曲の出版とその支払いに関する「ロイヤリティー契約」が結ばれ、それが(後に「黄金コンビ」と称された)彼らの結びつきのスタートラインとなった』という点でしょう。そしてこの曲の絶えることがない売上げはスターク出版社 *John Stark & Son* の後の発展に大きく貢献しましたし、そのロイヤリティーもジョプリン自身の貴重な安定的収入源として、終生に渡って彼の音楽活動を支え続けました。ただそれは、「『メープル・リーフ』の作曲者」という肩書きが、その後の様々な音楽活動に対しても「つきまとう」ことを意味していたのですが…。

【曲想について】

上記のジョプリン自身の発言にも認められるように、この作品には楽句から楽節・和声構成に至るまで、それまでのラグとは異なる独特の創意と工夫が見られます。

1拍目に休符を打ってくる独特のシンコペーションが規則的にきざまれた後に、不安定な和音へ移行、その後デミニッシュスケールでいきなり頂点へと駆け上がるというこの第1楽節のスタイルは、ジョプリン自身にもお気に入りのものとなったのでしょうか。彼の後のキャリアの中で、同じような構成をとる曲が何曲も見つけられます。(もちろん新しい曲には、都度それぞれに工夫が盛り込まれているのですが。)

第2楽節は、セブンスを強調したシンコペーションの規則的なリズム全体に「ポリリズム的展開」を見せています。安定的な昂揚感を徐々に作り上げていき、「ハートがウォーミングアップされていく」ような感じがしてくるのではないのでしょうか。そしてその後の第3楽節で、転調と共にあふれ出る躍動感が「和音のシンコペーション」として表現されていきます。

それまでのラグタイムの一般的な形式が「3楽節形式」だったのに

対し、ジョプリンはその後のキャリアでほぼ常に「4楽節形式」を採っていきます。この曲は、その「はしり」であると同時に、このスタイルを広く人々に認知させるのに大きな役割を果たしたとも言えましょう。そして、「第3楽節との関係と第4楽節に与える役割」によって、その曲の締めくくりと全体の構成感を演出する」という独自のスタイルを確立していったと考えられます。この『メープル・リーフ』においては、最後の楽節に対して第3楽節から再度転調する一元の調に戻すことにより、昂揚感をゆるやかに落ち着かせながら、曲の締めくくりを「着地させる」形をとっています。

様々なタイプのシンコペーションを含む点やデミニッシュやセブンスを強調した和音構成、起承転結を意識した楽句・楽節構成など、この曲に見いだせるスタイルには、ジョプリンの「ラグタイム」に対する意識的な方法論が後に「クラシック」ラグタイムと呼ばれる訳ですが、強く感じられます。またこのことは、彼がそのキャリアの早い段階から「音楽のドラマ性」や「リズムと曲調の関係性」について、考察を伴いながら作曲を進めていた点をも、私達に示唆しているように思えます。

【ギター演奏について】

全体を通じて、アルペジオ的な音型と規則的なリズム形式で構成されていますが、休符を含めたそのシンコーペーションスタイルは各楽節によって様々なバリエーションを見せています。これら表現するためには、各弦に渡るピッキングを乱れずにキープしながら、それぞれの楽句を曲のリズムに乗せていくことが必須となります。

第1楽節でオクターブに渡り展開される印象的な楽句は、ハイポジションで指をフルに使用するフォームになりますので、しっかりと押弦して響きが美しく出るよう練習しましょう。

第2楽節は、原譜では「stacc. (スタッカート)」となっていますが、このゴージャスな雰囲気ギターで出す場合、ある程度テヌート気味に弾いた方が良いのではないのでしょうか？

第3楽節では、和音リズム型の後に来る16分の楽句で走らないように気をつけましょう。最後の楽句は弦飛び和音(①弦&③弦)が頻出しますので、ピッキングに注意を払って練習してください。

第4楽節は少し落ち着いた感じに弾きたいのですが、あまり派手さの無いこの楽節を、だらけないように弓を締め弾くのは以外と難しく思われます。テンポ感や表情の工夫を考えてみてください。

♪ プレイングアドバイス

[0:4] ベース音の1Fを十分キープ。次の2Fに先走って移行するとテンポが乱れます。

[6:4] 休符はミュートして。

[8:4] ハーモニクスが綺麗に出るよう。

[10:1] ハーモニクスはアタック的に、全弦を綺麗に発音するのは、この場合難しいと思います。

[12:1-3] PCをすばやく的確に。

[14:4] この最後の音から続くメロディーラインは、ベース音と近接しているので、埋もれないように意識して。

[17:4] 「入り」のベース音を大事に扱おう。

[18] 特にこの楽節では、ピッキングする指を予め決めて練習した方がスムーズに弾けるでしょう。

[18:1] ②7FはCj。休符に続くメロディの頭に少しアクセントを置くと、フレーズがしまります。

[19:4] このベース音は次音へつながる大切な「ライン」を形成するので意識して。以下2小節ごと同じ。

[20:4] 最後の②開放の音はミスピッキングしやすいので注意。24&28小節目も同じです。

[22:1] ⑤2F人指、②3F小指、①2F薬指、③2F中指で押弦。

[22:3] ②1Fは人指で押弦。

[25:4] ⑥6Fのストレッチは、2拍目で人指が固定されたときにあらかじめ準備するとスムーズです。

[31] メロディーラインはアルペジオで。

[33:2-4] 最初の②7Fはグリスアップでも。

[36:3] ⑥3Fは親指、③4Fのプリングは小指で。

[37] プリングで出すメロディーを綺麗に。

[38] ①開放の発音後ミュートは難しいので、ここは残響させっぱなしでも違和感はないと思います。

[43:4] 最後の16分音符を正確に弾くのはかなり難しいですが、④6Fを発音した後に「あえて」指を離弦した方が、続く音が綺麗に出るでしょう。

[45] ここはアルペジオ的のこしないうまうが良いでしょう。

[52:2] 開放弦の時に PC。メロディーが段階的に上昇する形を綺麗に出せるように練習して下さい。

[54:2-4] 5Fは Cjで、4拍目で3Fに PCします。

[57:2-3] ③2F & ④4Fの和音のときに⑤1Fも人指でフォームを作的準備しますが、その結果として人指の腹で①開放が自然とミュートされます。

[65] 前小節目からシンコーペートして入るメロディーは、低音弦中心のため綺麗に出にくいかも。

[66:4] ⑥1Fをキープしたまま、手首を「ぐっと」前に突き出す感じで小指を 6Fへストレッチ。難しければ、1Fは16分音符扱いでカットします。

[67] 6Fをキープしたまま、人指を2Fに移行。これを支点に Cjで③2Fを弾き、次にセーハの腹を浮かして開放弦を弾きます。(理屈ではそうですが、実際は余り上手く発音できないですね)

[67:3] このフォームは意外と難しいので要チェック。

[69:3] 最後の和音は親指のブラッシングでも。

Maple Leaf Rag

By Scott Joplin (1899), Arranged by H. Aoki (1999)

TablEdited by H. Aoki

Tuning : DGDGBE

Capo : 1

Musical notation for measures 1-5. The top staff is a treble clef with a key signature of three flats and a 2/4 time signature. The bottom staff is a guitar tablature with strings E, B, G, D, G, D. Measure 1 starts with a forte (*f*) dynamic. The notation includes various rhythmic patterns and fingerings.

Musical notation for measures 6-11. The top staff continues the melody. The bottom staff includes a section marked *p* (piano) and *cresc.* (crescendo). A large watermark 'SOUND' is overlaid on the page. The notation includes a 'Ho' (harmonics) instruction and a '[Har.]' (harmonics) instruction.

Musical notation for measures 12-17. The top staff continues the melody. The bottom staff includes a section marked *To* with a first ending symbol. The notation includes various rhythmic patterns and fingerings.

Musical notation for measures 18-23. The top staff continues the melody. The bottom staff includes a section marked *f* (forte). The notation includes various rhythmic patterns and fingerings.

Musical notation for measures 24-29. The top staff is a treble clef with a key signature of three flats (B-flat, E-flat, A-flat) and a 2/4 time signature. The bottom staff shows guitar tablature for Treble (T), Alto (A), and Bass (B) positions. Measure numbers 24, 25, 26, 27, 28, and 29 are indicated above the tablature.

Musical notation for measures 30-34. The top staff is a treble clef with a key signature of three flats and a 2/4 time signature. The bottom staff shows guitar tablature for Treble (T), Alto (A), and Bass (B) positions. Measure numbers 30, 31, 32, 33, and 34 are indicated above the tablature. A first ending bracket labeled '1.' and a second ending bracket labeled '2.' are present above the staff. A 'Ho' marking is above measure 34.

Musical notation for measures 35-39. The top staff is a treble clef with a key signature of three flats and a 2/4 time signature. The bottom staff shows guitar tablature for Treble (T), Alto (A), and Bass (B) positions. Measure numbers 35, 36, 37, 38, and 39 are indicated above the tablature. 'Po' markings are above measures 36 and 37.

Musical notation for measures 40-45. The top staff is a treble clef with a key signature of three flats and a 2/4 time signature. The bottom staff shows guitar tablature for Treble (T), Alto (A), and Bass (B) positions. Measure numbers 40, 41, 42, 43, 44, and 45 are indicated above the tablature. 'Po' markings are above measures 40 and 41, and a 'Ho' marking is above measure 45.

SAMPLE

The Modern Ragtime Guitar Solos : vol.1
by Hidaka AOKI

発行・発売：RAGタイム



Copyright 2000 By RAG-TIME_Hidaka AOKI

International Copyright Secured. All Rights Reserved. Made In Japan.

本書の無断複製・転載・販売を禁じます。